

## 退職男性の地域活動グループの育成とグループ活動の変化からみた活動推進要因

滝澤 寛子\*<sup>1</sup>・若林 佳子\*<sup>2</sup>

目的：退職男性の地域活動グループを育成し、その活動経過からグループ活動の推進要因について検討した。  
方法：55～65歳の男性を対象に、活動を通じて地域とのつながりを充実させていくことができるグループづくりを目指して、講座を企画し、2007年、2008年に実施した。活動場面への参加観察と、グループメンバーへの聞き取りによりグループ活動の経過を把握し、活動展開をまとめた。活動の発展過程から、グループ活動の推進要因を抽出した。  
結果：継続して参加した者は、2007年が23名の申込み中19名、2008年が12名の申込み中12名、計31名だった。各年度の講座終了後、「このまま別れるのはもったいない」と参加者の中から声があがりグループが誕生した。グループ活動の経過から活動の推進要因として5つ抽出した。参加者側の要因として、「肩書きにこだわらず互いをよく知ること」「自分たちにできることへの挑戦とその成果の実感」「縛られない自由と楽しさ」の3点、活動方法に関する要因として、「さまざまな団体との交流や協働」「活動拠点があること」の2点を見出した。今後はいかにメンバーを確保するかがグループ活動の課題である。  
結論：退職男性の地域活動グループを育成し、その活動経過からグループ活動の推進要因について検討した結果、5つの要因を抽出した。メンバーの確保が今後の課題である。

〔日健教誌、2013；21(3)：236-244〕

キーワード：退職、地域活動グループ、社会参加

### I はじめに

2007年に団塊の世代が退職を迎え、仕事中心の生活から地域とのかかわりを充実させていく生活へと移行させている。定年退職者の生活の変化では、退職を肯定的に捉え新たな人生を求めて生活を充実させていく者と、空虚感から抜け出し難い者がいることや、男性の方が余暇時間をもてあます傾向にあることが示唆されている<sup>1)</sup>。また、中高年者にとってボランティア等の社会貢献活動が心身の健康を高めることも示されている<sup>2-5)</sup>。退職者、とくに男性にとって、地域社会への参加は健

康づくりの上でも重要な課題である。

団塊世代や退職者の地域社会参加の支援については、健康長寿のまちづくり推進の視点から団塊世代の人材活用・ネットワーク形成の方策を検討するため全国の先駆的取り組みを調査分析したものの<sup>6)</sup>のほか、健康づくり講座の実践報告<sup>7-9)</sup>が数件みられるのみである。これらの報告は、先駆的取り組みから、自治体の関わり方と活動を行う上での課題および対策について整理した提言や、団塊世代や退職者へのアプローチのポイント・工夫について示唆を与えるものとなっている。しかし、団塊世代や退職者がグループを形成し活動を展開していく上で、グループ活動を追跡しその推進要因を見出しているものはなかった。

本稿では、退職を健康的な生活を手に入れる契機と捉え、グループ活動への参加を通して地域とのかかわりを充実させていくことを目指して、退

\*<sup>1</sup> 京都大学大学院医学研究科

\*<sup>2</sup> 長浜市健康福祉部湖北地域介護認定審査室

連絡先：滝澤寛子

住所：〒606-8507 京都市左京区聖護院川原町53

京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻

E-mail：takizawa.hiroko.5u@kyoto-u.ac.jp

職男性の地域活動グループづくりに取り組んだ活動について報告する。特に、誕生したグループの活動経過から、グループ活動の推進要因について検討したことを報告する。

なお、本稿では、一定時期に年齢が主な原因で自発的もしくは強制的に職を辞す、いわゆる定年退職の前後数年間にある男性を退職男性とした。

## II 方 法

### 1. グループ育成を目指す講座の企画・実施

講座は、人口84,942人、65歳以上人口割合20.2%（2007年10月）のA市で行った。A市の55～64歳人口は、10,915人で全体の12.8%にあたり、うち55～59歳の男性は3,084人、28.3%を占める。A市が55～62歳の男女2,300人を対象に行った調査では、退職後やりたいことがある（あるいは、すでに実行している）人は56.8%、自分の経験や技術を活かせる地域活動に参加したい人は51.5%を占め、特に、自分の経験や技術を活かせる地域活動への参加意思は、女性が46.4%に対して男性が54.4%と高かった。

また、A市の産業構成は、第一次産業が3.4%、第二次産業が38.1%、第三次産業が57.1%（平成17年度国勢調査の結果）で、全国に比べて第二次産業の占める割合が多く、2007年の製造業事業所数232か所（工業統計調査の結果）のうち97%が従業員数299人以下の事業所である。中小企業では退職準備について十分な支援が行いにくいことが推測される。

そこで、55～65歳の男性を対象に、退職後の人生を充実させるために、①地域活動に参加していく必要性を理解し、②その資源となる健康づくりの実践と、③これからともに活動し支えあう仲間となる関係づくりを目指す講座を企画し、2007年、2008年に実施した。

周知方法は、①広報・ホームページ、②記者発表による新聞地方版への記事掲載、③58～63歳男性への個別通知によって行い、「あなたの豊富な経験や奥の深い知識あるいは技能を活かして、地域

で出来る活動を探しましょう」と呼びかけた。講座の名称を「地域で輝く☆男の仲間づくり講座」とし、「男の」と明言することで、男性参加者が得やすいように配慮した。

講座の内容を表1に示した。これからの健康づくりに地域活動に参加していく必要性を調査結果を用いて示し、地域で活躍している先輩の話をきき、その活動を体験し、さらに、自分たちが活動を展開していくうえで活用できる活動方法や社会資源の情報について学習しながら、仲間づくりができていくよう展開した。途中、おまけ講座として「まちなか散策」を行い、地域への関心を高められるように工夫した。また、第1回では、自己紹介に先立ち「肩書きを捨てる」というルールを提示し、今までの会社組織の縦の関係と異なる水平な関係づくりの特性についての学習を加え、同じ立場で新たな関係づくりをしていけるようにした。

講座の企画では、①目的の明確化、②団塊世代男性の嗜好の取り入れ、③体験コースの選択など参加者の主体性の尊重、④ネーミング、⑤健康づくりと仲間づくりの学習、⑥地域への関心を高める、⑦社会資源の情報提供、⑧やりたいことに対応した支援に配慮した。

2007年の講座終了後、講座の評価を行う目的で、継続して参加していた19名のうち面接の都合がなかった10名に聞き取り調査を行った。健康づくりや仲間としての関係づくりの変化と講座の感想から改善点を見出し、2008年の講座を企画した。

### 2. グループの誕生とその後の活動追跡

グループ活動の経過について、活動場面への参加観察と、グループメンバーへの聞き取りにより把握し、活動展開をまとめた。活動の発展過程から、グループ活動の推進要因を抽出した。

### 3. 倫理的配慮

調査に先立ち講座参加者には、調査の目的・方法、調査への協力は自由意思によるものであり、いずれの時点でも同意を撤回することができ、それにより不利益がないこと、守られるべきプライバシー等の権利について文書と口頭で説明し、文

表1 講座のプログラム概要

回数	各回の講座名	各回のねらい	プログラムの概要
1回目	プロローグ 『ようこそ、自分活 かしの講座へ』	①自分が講座に参加する目的を明確にする。 ②これからの生活に地域活動参加の必要性を理解する。 ③新しい仲間づくりの必要性を理解する。 ④参加者（どんな人たちが、同じ仲間だ！）を知る。	・講座開催主旨説明。 ・ゲームで自己紹介。 [講義] これからの健康づくりと地域社会。 [DVD] 仲間づくりとは？ [GW] 参加動機と「自分」の紹介。
2回目	『僕が輝いている 時空！』先輩の話 を聞こう	①退職後の生き方のモデルをもつ。 ②「地域」に関心を向ける必要性を感じる。	[ミニ健康教室] メタボリックシンドローム。 [講義] 地域で活躍中の先輩の体験談。：退職してから現在の活動に至るまで、始めた頃の気持ちや現在の気持ちなど。
3回目・ 4回目	体験講座① 体験講座② 『やってみよう！ いってみよう！』	①実際に地域活動に参加し、からだところを使って、体験する。 ②活動を通じてお互いを理解しあうことができる。	A：料理コース 男の料理ボランティアと一緒に調理実習。 B：自然環境コース 農村地域の環境に触れ、学び、伝えていく活動をしているグループの里山整備に参加。 *興味のある方を選択して参加する。
5回目	『あなたを待っている 人のために！』	①ボランティア活動について理解する。 ②からだところを使って感じてきたこと、考えたことを報告しあい、そこから自分の問題意識や可能性に目を向ける。	[ミニ健康教室] がん予防。 [講義] ボランティア活動ってなあ～に？ [意見交換] 体験講座に参加して：気が付いたこと、楽しかったこと、驚いたこと、必要だと思ったこと、実践しようと思ったこと。 [情報提供] 地域の課題。
おまけ	『まちなか見学・私の 気づき』	①まちなかを散策し、地域の実態にふれ、課題を発見する。	2時間弱、まちなかを散策。
6回目	『いきいきしている あなたを見ていたい！』	①自分のやりたいこと、これからのことや、この講座仲間への思いを表現できる。	[ミニ健康教室] 認知症予防。 [演奏会] 音楽ボランティアによる演奏会。 [意見交換] これからのことを考える。 [情報提供] 地域の課題。
7回目	『君とならやれる！ 僕に任せてくれ！』	①コミュニティ・ビジネスについて理解する。 ②定期的に同窓会をしたいと思いつく計画できる。	[講義] コミュニティ・ビジネスで仲間づくり。 [交流会] 食事をしながら、これからのことを考える。

書で同意を得た。なお、本調査は、滋賀県立大学研究に関する倫理審査委員会の承認を得て行った。

### Ⅲ 結 果

#### 1. 講座参加者の状況と2年目の変更点

2007年は23名の申込みがあり19名が継続して参加、2008年は12名の申込みがあり全員が継続して参加した。なお、本調査には、講座に継続して参加した全員の同意と協力が得られた。

年齢は58～65歳で、平均年齢は2007年が61.0

(SD 2.2) 歳、2008年が62.4 (SD 2.4) 歳であった。2007年の平日夜の開催時は、58歳と62歳が4名ずつ、61歳と63歳が3名ずつと定年退職年齢と考えられる60歳前後の参加者が多かった。2008年の土曜日開催時は、65歳が3名、59歳、60歳、63歳、64歳が2名ずつと実際に退職を迎えた年齢層の参加者が多くなった。

参加動機として講座内で語られたものを複数回答で分類すると、「地域で何かしたい」が2007年は19名中5名、2008年は12名中7名で、計12名と一

番多かった。ついで「仲間づくり」が計5名、「生きがいさがし」「これからを考えたい」「学びたい」が計3名ずつで続いた。

2007年の講座終了後、継続して参加していた10名に聞き取り調査を行った結果、仲間づくりに関連して「顔と名前が一致しない」「うち解けていない」という声が8名から聞かれた。その要因としては「回数が足りない」「円になって顔を見合わせて思いを話し合う機会が必要だ」という意見であった。2007年は、仕事を終えてからも参加可能な時間として、平日夜2時間の設定で開催した。参加者同士の交流がもてるように話し合いの場をできるだけ多くとりたいたいと考えていた。しかし、実際には時間に限界があり十分に話し合う時間をとることができなかった。そこで、2年目は、「土曜日3時間」の枠で開催し、グループワーク・トレーニングの相互理解を深める技法<sup>10,11)</sup>を活用しながら、各自の趣味や特技、大切にしたいこと・やってみたいことなどを互いに知ることができるグループワークを毎回取り入れるようにした。また、名前と顔を覚えやすいように写真入りの名簿も配布した。そして、グループワークでは2007期生の参加協力を得たことで、2008期生が自分たちの今後を考える手助けになっていた。

## 2. グループの誕生と活動経過

各年の講座終了後、「このまま別れるのはもったいない」と参加者の中から声があがり、設立総会の会食が設けられ、グループが誕生した。グループには、各年の講座に継続して参加していた者全員が加入した。

2つのグループ共に、「健康で生きがいのある生き方を求めつつ、日々の生活を充実／エンジョイすること」といった目的で、会長、会計のほか、幹事を名簿順に担当しなから定期的に会食をもち活動を始めた。活動の参加形態は、会食など事前に人数把握が必要な時を除き出席の確認等を行うことはなく、参加したい人・参加できる人が参加し、その時に集まったメンバーで活動する形となっている。

### 1) グループ A の活動経過

グループ A の活動経過を図1に示した。

第2回定例会の準備段階で運営上の問題が生じ、今後の方向について全員で話し合いがもたれた。その中で「みんなが、どんな技術や趣味をもっているのか、知る時間が必要だ」「こんなことをやってみたくか夢や目的を、いろんな人と話すことで見つけていこう」という意見がだされ、会食を重ねながら、『お互いを知りつながりをもつ活動』が展開された。

数か月たつと、「この仲間で、何か取り組めることはないか」と、活動事例の見学や、商店街やまちづくり NPO 団体主催の活動支援要請にこたえて地域の活動に参加したりするようになった。そんな中、グループメンバーの一人が参加していた他の講座グループとの協働企画がもちあがり、「まちにもっと笑顔を！」と過去に、まちづくり NPO 団体を中心となって企画してきた『寄席』を、10年ぶりに復活させることになった。まちづくり NPO 団体とも協働しながら、嘶家の手配・会場準備・チケット販売、すべての過程をメンバーの得意分野を活かした役割分担ですすめ、最終的に、チケット総売上枚数153枚、当日入場者数117人、収益25,000円弱を社会福祉協議会に寄付する成果を残した。その後の定例会では「やればできる」「このメンバーの力を確認できた」と互いに成果を確認しあい、「当初は今回限りと思っていたが、参加者の声、出演者や周囲の人の声をきいて、来年

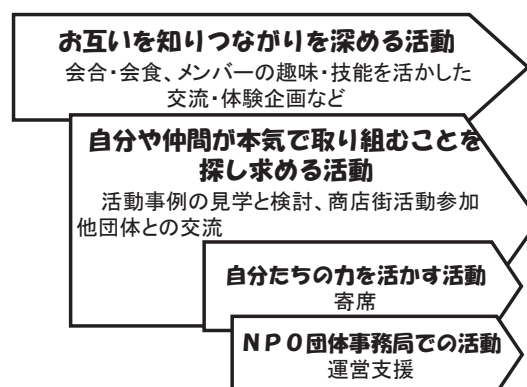


図1 グループ A の活動経過

も引き続きやっていきたい」と、その後も継続して毎年開催するようになった。

さらに、まちづくり NPO 団体との協働活動をきっかけに、NPO 団体事務局の運営の一部を担うようになった。

現在は、定例会のほか、会食やグランドゴルフ、ボーリング等のグループメンバーの交流活動、地域への貢献として、図書館の植木剪定のボランティア、寄席、まちづくり NPO 団体の事務局の運営手伝いを行っている。

## 2) グループ B の活動経過

グループ B の活動経過を図 2 に示した。

高齢者福祉施設で瓢箪栽培に取り組んでいたメンバーの活動にグループで取り組んでみることからスタートした。高齢者福祉施設を活動拠点とし、施設の植木剪定作業や花壇整備などを行うほか、会報誌を毎月発行して施設入居者に配布し、活動拠点の人たちとの関係づくりを図りながら、瓢箪栽培をすすめた。そして、「できた瓢箪を使って何かをやろう」と、瓢箪の絵付けの仕方について学習会を行い習得すると、活動拠点の施設の入居者や、メンバーのネットワークを使って放課後児童クラブの小学生を対象に『瓢箪の絵付け教室』を企画・開催した。この活動は新聞でも紹介された。メンバーにとっては、この体験で「自分が元気もらった」「人が喜んでくれる活動が自分にとっての喜びになることを新しい仲間との活動の中で気づくことができた」と、瓢箪づくり以外の活動で

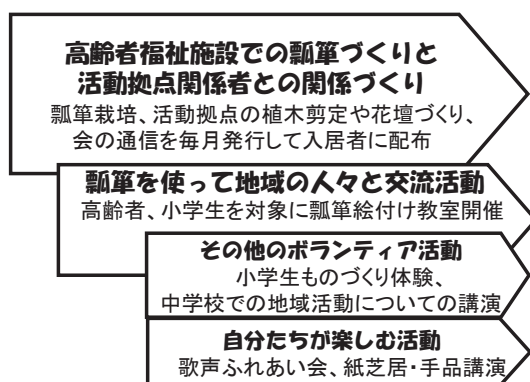


図 2 グループ B の活動経過

も高齢者や児童、しょうがい者など地域支援活動を考えるようになった。

継続して絵付け教室を、しょうがいのある子どもたちや小中学生などを対象に企画・開催するほか、ボランティアセンターと連携して、小学生へのものづくり体験学習として、竹とんぼや輪ゴム鉄砲教室を実施するようになった。

そのような活動が進む中で、「自分たちが楽しむことも大切だ」と歌や趣味を生かした活動も取り入れながら活動を展開するようになった。そば打ち体験学習会を開き、デイサービスセンターの利用者・職員に振る舞う活動も始まった。

現在も、定例会のほか、小学生を対象に竹とんぼや輪ゴム鉄砲のものづくり体験等を通じた世代交流の活動、高齢者を対象にした瓢箪の絵付けやそばの振る舞い活動、施設からの依頼による花壇造成ボランティアなどを行っている。

## IV 考 察

### 1. グループ活動の推進要因

グループ A, B の活動経過から考えられた活動の推進要因として、次のことが考えられた。

#### 1) 肩書きにこだわらず互いをよく知ること

グループ A では、「どんな技術や趣味をもっているのか」「夢や目的」を、お互いに話すことから活動が始まった。一方、グループ B は、講座の中に、グループワーク・トレーニングの相互理解を深める技法<sup>10,11)</sup>を活用したグループワークを取り入れたことで、各メンバーの趣味・特技、現在の取組みや思いなどを参加者の中で共有でき、メンバーの一人が取り組んでいる活動にみんなで取り組んでみるというスタートをきることができた。グループの会話では、新たな仲間との活動を模索していく上で、一人一人のもっている技術や関心事が大事にされていた。グループが成立する条件として、①各成員が対面的な関係にあること、②成員間に相互作用が行われていること、③成員相互間に個人的な印象や知覚を有すること、があげられる<sup>12)</sup>。グループ形成の段階で、参加メンバー

の1人1人が、肩書きに拘らず、どんなことに興味関心があり、どんなことを考えているのか、その人物像を相互に捉えることができる活動が必要である。そして、そのような活動の導入前に「肩書きを捨てる」というルールへの提示や、「今までの会社組織の縦の関係と異なる水平な関係づくりの特性」について学習することを加え、同じ立場で新たな関係づくりを始めることができるようにすることも必要なことである。

## 2) 自分たちにできることへの挑戦とその成果の実感

2つのグループともに、『寄席』『瓢箪を使った交流活動』など、自分たちにできることを見出して挑戦し、その結果「やればできる」「自分が元気づけられる」という実感を味わうことが、次の活動の発展につながっていた。それは、「このメンバーとなら、自分ひとりではできなかったことができる」魅力であるといえる。また、両グループメンバーの多くが「地域で何かしたい」という思いをもって講座を受けグループに残った。自分たちにできることとして取り組んだ活動は、それを実現する体験になっている。グループに留まるように働く力である集団凝集性が高まる条件として、集団に参加することによって個人の要求を充足させることができることや、その集団が社会から認められたりしたときなどがいわれている<sup>13)</sup>。自分たちにできることへの挑戦とその成果の実感は、グループの形成維持を強化することにもつながっている。

山田ら<sup>14)</sup>は、地域の健康づくり活動を行う住民組織のメンバーのモラル（集団の士気の高まり）を高める要因として、実践、評価、内外の刺激をあげている。自分たちにできることへの挑戦とその成果の実感は、まさに実践と評価であり、活動を通して他者からの刺激を受ける機会である。その体験を通して、グループ全体のやる気が高まり、次の新たな活動へと結びついていくのであろう。

## 3) 縛られない自由と楽しさ

参加するのもしないのも「自由」という参加形

態と、参加することで得る「楽しさ」の存在は、メンバーひとりひとりの参加意欲や継続性につながる。

講座やグループ活動を通じて、両グループのメンバーからは「自分では出来なかったことができる」「これまで（会社）と違い、いろんな人の話が聞けて、知らなかったことをいろいろ知れて面白い・楽しい」という声が聞かれた。また「今まで（会社では）一生懸命させられてきたので」「元気で、頑張り過ぎない方がいい」という声もあった。グループBでは、「自分たちが楽しむことも大切」と活動を加えていた。グループメンバーたちは、今までの会社組織とは違う関係・仲間を求めており、縛られない自由の中で、参加することで得る楽しさがあり、無理することなく続けていくことを望んでいるようであった。

掛本<sup>15)</sup>は、退職移行期にある高齢男性の健康増進行動に関する要因を検討している。そして、年齢に応じた健康状態の変化がある自分を認識し、年並みの健康状態を納得する作業を自分自身に対して行う一方で、他者に対して元気であることを示す二重の健康提示を行い、就労に基づく、もしくはそれ以外の人との結びつきにより社会における自分の価値を確認することが健康の維持増進につながっていることを示している。メンバーたちは、自分の健康状態の変化を考え、就労に代わり、無理なく続けていける「人とのつながり」を求めていたのではないだろうか。そして、その人とのつながりの中で、自分の価値を確認することで、健康の維持増進が図られているのであろう。

## 4) さまざまな団体との交流や協働

2つのグループともに、まちづくりNPO団体や、ボランティアセンター、放課後児童クラブなど、活動を通じて他団体とのつながりができることが、活動の場を広げていくことにつながっていた。

地域全体の健康課題解決に取り組む住民組織の地域発展への支援として、活動に適する資源との協働を促すといった「ネットワーク化」があげられている<sup>16)</sup>。グループAでは、グループが活動内

容を模索しているときに、グループづくりに携わった支援者が、商店街やまちづくりNPO団体が主催する活動支援要請の情報を提供し、最初の接点をつくった。それが、『寄席』の協働活動につながっていった。グループBでは、グループ発足後、講座の講師としてきていたボランティア・コーディネーターとつながりをもつことで、小学生へのものづくり体験学習の実施につながっていた。

今まで会社勤め等で地域とのつながりが薄かった男性にとって、地域のどこにどんな社会資源があるのかといった理解や、接点をもつ機会は限られたものしかない。その点を考慮して、今回の講座企画では、グループが活動をしていく上で利用できる場所・人を意識して、会場や講師等の協力者を設定した。その後、実際につながったかどうかを踏まえると、活用できる社会資源について情報を得るだけでなく、実際に利用してみる、話してみる、体験してみる、といったことが大切であることと、協働の機会について相手側からのアプローチや後押しがあることが必要である。

#### 5) 活動の拠点があること

グループAでは、まちづくりNPO団体の事務局という場を得たことで、グループBでは、高齢者福祉施設という活動の拠点があったことで、グループの運営や活動の展開に違いがあった。メンバーの集う場として、今後の活動について議論する場として、グループの居場所があるかどうかは大きい。

団塊世代の人材活用・ネットワーク形成の先駆的取り組みを調査分析した報告書<sup>6)</sup>でも、活動の安定と発展のために必要なものとして、活動拠点があった。健康づくりグループが地域で継続的な活動をしていく上でのニーズとしても、活動の場として通年使える身近な施設というものがあがっている<sup>17)</sup>。グループA、Bともに、活動の拠点は、メンバーやグループ活動を通して得たネットワークで得ている。活動拠点を得る上でも、さまざまな団体との交流や協働が重要であり、それを推進することが大切である。

## 2. 今後のグループ活動における課題

今後のグループ活動における課題として、グループメンバーの確保がある。メンバー自身の体調や親の介護などで活動に参加できなくなるメンバーがでる一方で、新メンバーの参入がない。

両グループともに、口コミによるメンバー確保の活動のほか、グループBにおいてはホームページを立ち上げてメンバー確保に努めている。しかし、なかなか新メンバーが増えない状況が続いている。今回、講座の参加者のうち8割が個別通知をみて参加の申し込みをし、さらに妻や友人の後押しがあって参加を決めたという人もいた。新たな仲間との活動を始めたいという思いをもっていても、その一歩を踏み出すのに勇気があるのであろう。身近な家族や友人が、その一歩を踏み出す後押しができるような活動もあわせて考えていくことが必要である。

さらに、退職者の就労以外での社会参加の支援として、生涯学習センター等で学習や出会いの場が提供されている。退職男性がそのような場で、新たな出会いをきっかけに仲間をつくり社会参加を成し遂げる活動を展開していくことをねらえる講座の企画が重要である。つまり、新たな仲間との活動を模索していけるよう肩書きにこだわらず、参加者のもっている技能や関心事を話し合う場面づくりや、「さまざまな団体との交流や協働」が実現するように地域の社会資源との接点づくりを講座の企画段階で創意工夫することなどである。そして、退職男性が、今まで培ってきた能力を活かしコミュニティへの参加を実現させていく過程を通して健康を維持増進させていくことができるよう支援することが求められる。

## V おわりに

退職男性の地域活動グループづくりの講座を企画、実施した。講座終了後、年ごとに2つのグループが誕生した。誕生したグループの活動を追跡し、グループ活動の推進要因を検討した結果、「肩書きにこだわらず互いをよく知ること」「自分

たちにできることへの挑戦とその成果の実感」「縛られない自由と楽しさ」「さまざまな団体との交流や協働」「活動拠点があること」の5つを抽出した。今後はメンバーの確保がグループ活動の課題である。

退職男性が新たな仲間との活動を求めて一歩を踏み出す後押しを、身近な家族や友人ができるような活動や、退職男性が今まで培ってきた能力を活かしコミュニティへの参加を実現させていく過程を通して健康を維持増進させていくことができるような支援が求められる。

## 謝 辞

本調査に快くご協力くださいました講座参加者の皆さまに心より感謝申し上げます。また、講座の運営を手伝ってくださった、当時の高齢福祉介護課の職員の皆様とボランティアの皆様にも厚く御礼申し上げます。

本研究は、文部科学省科学研究費補助金（若手研究（B））「地域レベルへの発展までを目指した退職男性のエンパワーメントを促すプログラム研究」の一部であり、第21回日本健康教育学会学術大会で報告した内容に加筆、修正したものである。

## 利益相反

利益相反に相当する事項はない。

## 文 献

- 1) 斎藤ゆか. 定年退職後の生活の変化と個のボランティアリズムの形成要因—「プロダクティブ・エイジング」を可能にするための教育・学習の方向性—. 生涯学習研究 2005; 3: 67-81.
- 2) 藤原佳典, 杉原陽子, 新開省二. ボランティア活動が高齢者の心身の健康に及ぼす影響 地域保健福祉における高齢者ボランティアの意義. 日本公衆衛生雑誌 2005; 52: 293-307.
- 3) 藤原佳典, 西真理子, 渡辺直紀, 他. 都市部高齢者による世代間交流型ヘルスプロモーションプログラム“REPRINTS”の1年間の歩みと短期的効果. 日本公衆衛生雑誌 2006; 53: 702-714.
- 4) 杉原陽子. 中高年の社会参加～定年後の地域デビュー～. 東京都老人総合研究所編. 第80回・第83回老年学公開講座 地域への軟着陸 退職後も社会参加でイキイキと. 東京: 東京都老人総合研究所, 2005: 3-19.
- 5) 杉原陽子, 杉澤秀博, 柴田博, 他. プロダクティブ・アクティビティが中高年齢者の心身の健康に及ぼす影響—引退と健康に関するパネル調査の結果から—. 老年社会科学 2006; 28: 232.
- 6) 社団法人シルバーサービス振興会. 健康長寿のまちづくり推進のための団塊世代の人材活用およびネットワーク形成の方策等に関する調査研究事業報告書. 東京: 社団法人シルバーサービス振興会, 2007.
- 7) 竹原智美, 俣野秀樹, 庄田晴美, 他. 「2007年問題」に向けた保健活動 団塊の世代を地域に迎える対応 京都府亀岡市における「退職男性の健康づくり教室」の経緯と成果. 保健師ジャーナル 2007; 63: 124-128.
- 8) 山本恭子. 男心をつかむ保健師活動 男性へのアプローチのポイントをさぐる 団塊世代の男性の地域参加支援. 保健師ジャーナル 2007; 63: 978-982.
- 9) 佐藤真琴, 渋谷ちづる, 宇佐美賀代, 他. 健康はだの21（その8）退職者の力を健康づくりの舞台へ. 日本公衆衛生雑誌 2006; 53（10・特別付録）: 407.
- 10) 坂野公信, 佐藤靖典, 三信巖, 他著. 財団法人日本レクリエーション協会監修. 新グループワーク・トレーニング. 東京: 遊戯社, 1995.
- 11) 岡崎光, 加藤達也, 上石厚志, 他著. 日本グループワーク・トレーニング協会監修. GWTのすすめ・ヒトを人にする. 東京: 遊戯社, 2003.
- 12) 青井和夫. 小集団の構造と機能. 今日の社会心理学3 集団・組織・リーダーシップ. 東京: 培風館, 1962: 4.
- 13) 岡堂哲雄. 集団力学入門—人間関係の理解のために—. 東京: 医学書院, 1974: 43-48.
- 14) 山田小織, 重松由佳子, 伊藤直子. 地区組織のエンパワーメントを目指した行政保健師活動に関する一考察～A地区健康づくり活動メンバーのモラルに着目して～. 西南女学院大学紀要 2007; 11: 23-32.
- 15) 掛本知里. 退職移行期にある高齢男性のヘルスプロモーションに関わる要因の検討. 東京女子医科大学看護学部紀要 2003; 5: 37-43.
- 16) 山田小織, 守田孝恵, 伊藤直子. 住民組織における保健師の支援内容とメンバーの活動意欲. 保健医療科学 2010; 59: 159-168.
- 17) 保田玲子, 清水光子, 照井レナ, 他. 地域に根ざす住民主体の健康づくりグループ活動の発展に関する一考察. SCU J Des Nurs 2008; 2: 17-24.  
(受付 2012.12.28.; 受理 2013.6.10.)



## Supporting develop community activity groups for retired men and identifying facilitating factors to promote their activities

Hiroko TAKIZAWA\*<sup>1</sup> and Yoshiko WAKABAYASHI\*<sup>2</sup>

### Abstract

**Objective:** We provided support to develop community activity groups for retired men and investigated factors related to promotion of group activities based on the progress of their activities.

**Methods:** In 2007 and 2008, we conducted a program for men aged 55 to 65 years to develop groups that would enable them to strengthen ties to the community through activities. We followed the progress of group activities through participant observation of activities and interviews with group members, and summarized the progress of activities. Factors related to promotion of group activities were identified based on the progress of activities.

**Results:** A total of 19 of 23 applicants in 2007 and 12 of 12 applicants in 2008 participated continuously in the program. After the program in 2007 and 2008, each group was established as the participants hoped to continue the group activities.

The following five facilitating factors of the group activities were identified during the activities: ① Getting to know each other well without minding titles, ② Pursuit of challenges that are within reach and recognition of their outcomes, ③ The freedom and joy, ④ Exchanges and collaborations with various organizations, and ⑤ Having a base of operation. Obtaining a sufficient number of members was considered an issue for future group activities.

**Conclusion:** We identified five facilitating factors to promote group activities and need for obtaining more members as issue for future group activities.

[JJHEP, 2013 : 21 (3) : 236-244]

**Key words:** retired men, community activity group, community participation

---

\*<sup>1</sup> School of Human Health Sciences, Faculty of Medicine, Kyoto University

\*<sup>2</sup> Kohoku Area Certification of Needed Long-Term Care Section, Health and Welfare Department, Nagahama City